

長篇現代小説

花嫁の父

土岐雄三著



文華新書

「文華新書」刊行のことば

新しい宇宙時代に生きる現代人は、今日に強く、さらに明日に逞しく生きるために、どんなままで文化教養の指針を求めています。

この新書は、激動と混乱の世代に知識を整理し、新しい法則を追求し、美と愛、生と死、結婚と性などについて、尊い価値を創造し、生活を豊かにすることを願って刊行するものであります。そして、今日と明日への教養と実益を追求するものと、興趣のつきない読物とを、シリーズとして、文化の華を開かせたいと願います。

なお「文華新書」の内容、造本など既刊のもの及び今後の刊行について、ご意見などお寄せ下されば幸甚です。

花 嫁 の 父

昭和41年8月10日 第1刷発行

¥ 270

著者との
諒解により
印刷停止

◎ 著者 土 岐 雄 三
発行者 大 島 敬 司
印刷所 杜 陵 印 刷 株 式 会 社

発行所 東京都千代田区丸の内 丸ビル783区 株式会社 日本文華社

TEL 東京・(201) 2752 4750 (211) 5063 振替 東京 43444番

○万一落丁、乱丁の場合は、返送次第本社でお取り替え致します。
○小社発行品切れの図書雑誌は近くの書店又は本社へご注文下さい。

長篇現代小説

花嫁の父

土岐雄三著

花
嫁
の
父

土
岐
雄
三
著

文華新書・小説選集

目次

獅子の座にこそ	8
植えたばかりの草だから	23
あなたはあなた、わたしはわたし	39
恋文は束にして	55
わが娘、こでまりの花にあらず	70
わが妻、おばあさんになるおそれ	91
好ましき青年にたじろいでいる私	113
わが娘に教えるランデブ・コース	131

よいお日柄という日を迎えて	150
娘はさりげなく言うけれど	172
その歌を歌ってはいけない	190
この寂しさはなんだろう	208
娘はやはり帰って行く	225

カバー装画・さし絵 小沢重行

花
嫁
の
父

獅子の座にこそ

一

「経ちゃんつぐみが死んでから、もう何年になるでしょうね」

久しぶりにカラリと暗れあがった日曜日の午後、茶の間でラジオをきいていたカミさんがなにを思い出したのかフトこんなことを言い出した。

経ちゃんというのは、慶応大学在学中胸を患って死んだカミさんの弟で、病気になるまでは、山岳部とワグネル（慶応大学の音楽の団体）に籍を置き、短い一生を山登りとヴァイオリンにつかい果したような青年であった。

「今更らしくなにを思い出したんだ？」



ツゴインエルワイゼンの調べが流れて……

せまい庭先でゴルフのクラブをふり廻している私は、練習の手をとめて茶の間をのぞきこんだ。

「この音楽……ツゴインエルワイゼンですか……よく絃ちゃんが弾いていたじゃありませんか……」

カミさんは耳をすまして遠いところを眺めるような眼つきをした。

「そうだったかなア……」

私には、はっきりした記憶がなかった。

義弟のヴァイオリンは、たしか一度か二度拝聴する機会もあったと思うが、それがどんな曲であったかはむろんのこと、うまかったのかまじかったのか、そのへんのこと甚だアイマイである。

ただ、ヴァイオリンは無性に好きだったらし

く、やかましいおやじどのに怒鳴りつけられながらもかくれるようにしてキーキーやっていたことを覚えてる。

いずれにしても昨今と違って、就職問題などで、神経をすりへらす必要もなかった、のんきな時代のこととて、弟は短いながらも、悔のない一生をすごしたことに間違いはない。

この義弟について、最もあざやかな印象がのこっているのは、彼がまだ丈夫で、学校へ通っていた時分のことだが、私と二人で、へべのレケに酔っぱらったある晩のことである。

当時、というのは、いまからほぼ二十三、四年前、私もカミさんもまだ二十代というたのもしい時代で、嫁に行った長女の頼子が、ようやっとハイずり廻る頃であるが、私たちの家は、小石川の関口台町にあった。

そこからカミさんの実家のある神田の今川小路までは、ほんのひとまた一跨ぎ。電車で十分か十五分ぐらいの距離だったからカミさんの兄弟達にとってはわが家は適当な足だまりだったに違いない。男八人、女三人、計十一兄弟姉妹が、とっかえひっかえ誰かしらん顔をみせていた。

その中でもこの経之助君は私とウマが合ったとでもいうのか足しげくやって来ては、私と飲みに出かけたものだ。彼は決して私を兄さんとよばなかった。私を雄ちゃんとよび、カミさんを（カミさんの名は美知代）ミイちゃんと呼んでいた。

（何分にも十人以上の兄弟のこととて、兄さん姉さんとよぶのは、ほんの上一人か二人であと

はみな名前をよぶ習慣になつていたらしい」

「雄ちゃん、出かけないか……」

彼は、その日も、そう言つて私を誘い出しに來た。十月も半ば近い日曜日の夕方、そろそろ湯豆腐の恋しいような季節であつた。

「うん……」私は、なんとなくカミさんの気配けはいをうかがつた。

結婚後一年半ぐらいといえ、最も家庭の味の身に沁みる時期であるにも拘らず私は、殆んど夜毎酒におぼれ、酔ちよめに沈ちんめ溺めしていたのである。

日が昏れば灯と酒が恋しく、酒友の訪れをソワソワしながら待ちかまえていたものだ。

「おでかけですか……」頼子を背中にくくりつけたカミさんは、前かけでぬれた手をふきながら、台所から出て來た。

「うん、経ちゃんが飲もうつていうんだ」

私は、それがなによりの理由であるかのように言つた。

「頼子がすこし熱っぽいんですけど……」

カミさんは、背中の赤ん坊を揺りあげ、額と額をくつつけるようにしながら、

「それに今朝からまた便もあまりよくないんです」

二十五年後の現在なら、もっと端的に、もっと直截に彼女は自分の言いたいことをズバリ言

つてのけるに違いない。しかし、二十代に於けるわがカミさんなるものは甚だ間接的な言い方で、極めて消極的にしか意志を表明しなかったのである。

そしてその程度の表現で私は格別動もしなかった。赤ん坊に熱があつて、便がわるいという事実は、気がかりでない事はなかった。だが、しかし、それだからといって、それは決して義弟の誘いを拒むほど強力なものでもなかったのだ。

「くすりあるンだろう……」と私は、カミさんに言った。

それから、「経ちゃん」と義弟に声をかけて、「今日は、ね、新調の洋服ができて来るンだ……それに靴も、ニューでね……だからどうもその意味でも一杯やらなくちゃきまりがつかないといったようなもんだ……」

カミさんはそっぽをむいていた。私が新調の洋服に着換える間、彼女は、黙って、頼子に乳房をふくませていたが、やがて、「経ちゃんはまだ学生ンですからね……」と、いかにも私のお調子をたしなめるような口調で言った。

二二

「雄ちゃん、ミイちゃんはあまりごきげんよくなかったね……」

飯田橋の交叉点に近い、行きつけの飲み屋に腰をおろすなり義弟は言った。

「頼ちゃんのぐあいが変わるインで、まずかったンじゃないかな……」

「なに、平気さ……」私は、腹に沁み入るような最初の一杯をぐつとあおって、

「どうせ、おれがいたっていなくなつておんなじことだ……」

若さというものはこわいもので、それから数年後、やがて三十の声をうしろにきくようになってからは、私は、カミさんや子供たちの、セキひとつクシャミひとつにも神経をとがらすようになつたが、その以前は、正直のところ遊びの方が面白かつた。

——あの頃は、なにしろたいへんだつたんだから。おかアさんや子供たちなんかそつちのけで、ただもう毎晩のように飲み歩いてね……。

カミさんは、折にふれ、子供たちを前に、当時の私の乱行ぶりを話してきかせる。

そういうカミさんの言葉つきや態度には、幾山河のり超え来たものの安らぎが自然にあらわれているようでもいかにもみごとだつた。

——二十五年間うまいぐあいに飼いならされましたよ——というのはカミさんのよくいう口癖で、多分に白慮じやうりょ的な意味も含まれているが、その幾分かは真実であつた。

どのような見方しても、私は決して、上等な亭主ではなかつたのである。

いまだきの若い奥さんなら、到底忍びがたいような真似を突に数々やり通して来た。

わがカミさんは、それを耐え忍んで四分の一世紀以上も生きて来ているのである。

私は世にいう恐妻家の仲間に入るかどうか知らないが、カミさんを崇^たえることでは決して人後^ごにおちないつもりだ。

もし、崇^{すう}妻^{さい}家^かという言語があるとすれば、私はまさしくそれに該当する。

カミさんは、一切をじぶんがえらんだ道だから、というだけの理由で、あらゆる苦惱、あらゆる障^{しょう}碍^{がい}を忍^{しの}び、許容し、克服して来たのである。

——親が反対したのを無理に來^きちゃったんですからね、いまさら、誰のところへ泣きつきに行くわけにもいかないじゃありませんか——

それがカミさんの生活倫理であり、世にも怪^{あや}しからぬ亭主である私は、その諦^{てい}観^{かん}の上にヌケヌケとあぐらをかいていたのであった。

思えばたしかに二十五年前のカミさんは、無力であった。家を外にのみ歩く酔っぱらいを亭主にもった憐^れれむべき女性の一人であった。だが、現在はどうか？

カミさんは二十五年間という年月の間に、いつの間にか一家の支柱となり、幸福の鍵をにぎる立派な主権者となっていたのである。

四人の子供たちはそれぞれに成長し、カミさんはゆったりと獅子の座についているのだ。

いまかりに、オヤジとカミさんの間に戦端がひらかれ、お手切れとも相成った場合に荷物をまとめて出て行くのは、カミさんに非^からで、私自身なのである。

柔よく剛を制したともいえようし、カミさんの忍従がよく今日のゆるぎない妻の座をかち得たともいえよう。

どんなに私自身が無軌道に振舞い、好き放題の真似をしようとも、所詮は、お釈迦さまの掌の上で、かけずり廻っていた孫悟空同様、カミさんの規範と範疇はんちゆうから脱しきれないのであった。

私はいま、ヨワイ五十にして、つくづく、それを思う。と同時に、天晴れわがカミさんと、彼女の見事な処世訓を心からほめ讃えるのであるが、それは昨日今日の話。当時はカミさんなんぞクソ喰えとばかりいざ飲まん哉、いざ遊ばん哉の、笛太鼓におどらされて、夜毎御前サマの態たらくをつづけていた。

眼のよるところに玉のたとえて、会社にも手頃の酒友が数名おり、学生時代の同窓や親類の同年輩のものなどもあげてくると、相手にことかくようなことはまずなかった。

ギザ（五十銭銀貨）一枚あれば、ちよいといい気持になれる結構な御時世であったし、三井三菱につとめているといえ、初めての家でもツケをきかしてくるような世の中だったから、僅かなゼニで、ともかく遺憾なく青春をアルコール漬にも出来たのであった。

軀は丈夫だし、カミさんは忍の一字を守っていてくれてるし、勘定はボーナス払で結構だし、酒の味がやっとなりかけかけてきた私にとっては、なにもかもが好都合であった。